
白

光里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白

【Nコード】

N3964C

【作者名】

光里

【あらすじ】

この世界では白い髪を持った人は呪われている・・・という妙な言い伝えがある。年をとって髪の色が抜けたのではない、最初から白い髪。そんな言い伝えのある中で懸命に生きる少年がいた・・・。

第一章『始まり』

ある。年をとって髪の色が抜けたのではない、最初から白い髪。そんな言い伝えのある中で懸命に生きる少年がいた……。

第一章『始まり』

山奥にあるのどかで小さな村「タチオ」。

そこにある今にも潰れそうな家。この村の住民は貧しい暮らしが強いられている。そのため服は紙切れのように薄くてボロボロ。鍬もサビだらけだ。少年が鍬を持って出てくる。太陽に照らされてキラキラと輝く白い髪。きれいな顔立ちをしている……タケルだ。炎天下の中、畑に入り鍬を振りおろし土を耕す。大粒の汗が頬に伝って水分を奪われていく。

「お兄ちゃん！」

向こうから幼い声。作業を中断し、声がするほうを見てみると、暑さを知らないような涼しい顔をした少女がこちらに走ってきている。妹のカスミだ。カスミは長く茶色い髪がなびかせて眩しい白いワンピースを着ていた。

「……どうした？」

「あのね！今日はお兄ちゃんの誕生日でしょ？何かしてほしいことはない？」

できるなら運命を変えたい。でもそんなことできるはずがない。

タケルは無表情で言った。

「……特にない」

カスミは寂しい顔をしてタケルの元を離れていった。タケルも作

業に戻る。タケルはカスミのことを大切に思っている。しかし、感情にうまく表すことができない。

それは、タケルが呪われた人間だからなのか・・・。

「おい！」

今日はよく邪魔をされる日だ。

村人たちがタケルの周りを囲む。村人たちの手には鍬や斧などを持っていて、殺気で満ちていた。

「・・・」

村人たちの中心である一人の男が話し始めた。

「今日はお前の誕生日だったな？この村のしきたりには十六の誕生日を迎えたものは大人とみなされ、しばらくの間この村から出なければならぬ。それは分かっているな？」

タケルは無言でうなずいた。

今まで出て行けと言わなかったのはこの時を待っていたからだろう。村のしきたりであれば従わなくてはならない。

「カスミのことは心配するな。あの子は見たところ普通の人間だ。俺が責任持って預かる。」

「預かる」？「引き取る」の間違いだろ？俺は出て行ったら最後戻ってこられない。

「・・・」

「明日、旅立て。準備をしておくんだな」

そう言っただけで村人たちは去っていった。タケルはその場に立ち尽くしていた。

その夜。部屋で明日の準備をしていると、カスミが入ってきた。

「お兄ちゃん・・・」

いつも明るいカスミには似合わない低いトーンで話しかけられる。様子がおかしいと思い、顔を覗いてみる。その顔は生氣を感じられない

「・・・た・・・たす・・・け、て！」

突然大粒の涙を流しはじめたカスミ。タケルはカスミを抱きしめ、背中を優しくさすってやる。すると、カスミの中から黒い煙が出てきた。その煙は天井付近に上がっていく。タケルはカスミを自分のベッドに寝かせた。

「・・・」

黒い煙を睨みつけるように見ていると、目らしい光がタケルを見つめる。

「・・・ふっ」

「・・・何がおかしい」

煙は蛇のようにタケルに巻きつく。タケルはうつとうしく思い、払おうとした。

「白い髪・・・お前、それが何を示しているかわかるか？」

何を示している？

タケルには何を言っているのか分からなかった。

「その白い髪は呪われている・・・いや、それ以上に恐ろしいことが起きる。」

「・・・何がおきるんだ？」

「それは自分で確かめるんだな？俺が言えるのは恐ろしいことが起きるといふこと、それだけ。お前はそれが何か知りたいか？」

知りたい。他にも知りたいことがたくさんある。

俺はどうして白い髪に生まれてしまったのか・・・。

なぜ白い髪は呪われるという噂が広まったのか・・・。

俺以外にはいないのか・・・。

・・・俺は存在しているのか？

「・・・・・・・・」

黙って頷く。煙は笑った。

「フツ、そうか・・・知って何になる？知ってもお前は不幸になるだけだぞ？」

タケルはそれでもかまわない・・・とまた頷いた。

黒い煙は巻きつくのをやめると、大きくなり、部屋を黒く染めた。すると、ホログラムのようなものが出てきた。それはどこかの国の映像だった。タケルはどこかで見ることがある・・・懐かしい気分がした。

「・・・この国の名前はラスカ。ここに行けばお前の知りたいことが分かるだろう」

なぜ自分にそんなことを言うのか、タケルは分からないでいた。

しかし、なにか裏がありそうで胸騒ぎが止まらなかった。

「では、また会おう。」

そういつて黒い煙は姿を消した。

その朝。

「お兄ちゃん！行かないで！」

カスミの泣き叫ぶ姿を背中にタケルは村から去っていった。

第二章「出会い」

第二章『出会い』

ざわざわと緑が揺れて、小鳥のさえずりがかすかに聞こえている。まだ猛暑が続いている。この世界に秋はない。夏が長いのだ。森の中は影なので多少な涼しいのだが、見ているだけで暑苦しいマントにフードを被った少年が歩いていた。タケルである。

カスミとの悲しい別れから一ヶ月はたつ。村を出て、町で必要なものを買い、国を出てこの森に入った。

この森の名は『迷^{めい}』。迷うという言葉からできた名前だ。

森に入ってもう三日はたっている。もう出てもおかしくないはずだ。どうなっているんだ？この森は。

暑さのせいで頭も混乱してくる。コートを脱ぎたいが、脱げば白い髪が見えてしまい何をされるか分からない・・・この森に人がいたらの話だが。

「・・・」

タケルは目の前が真っ白になりその場に倒れてしまった。

涼しい。ここはどこだ？

タケルは目を覚ました。木で作られた天井が見える。どうやらどこかの家らしい。ゆっくりと起き上がり辺りを見回す。特に怪しい

ものではなく、ベッドとテーブルとイスがいくつもあるだけの質素な部屋。テーブルの上には薬と水が置いてあった。

“ガチャツ”

目の前にあるドアが開き、タケルと同じ年齢くらいの少女が入ってくる。腰まである茶色いストレートの髪。赤に近いピンクのマントで、同色のスカート、手袋をしている。奇妙な格好をしているがその少女にとっても似合っている。

「気がついたのね？」

少女はタケルに近づいてくる。タケルは息を潜めた。

「そんなに警戒しないでよ。あたしはあなたの敵じゃないわ。あたしの名前はアイ。ここで魔法の修行をしているの」

魔法……。昔話だと思っていたが、本当にあつたんだな。魔法とは昔から語り継がれている不思議な力のこと。今では魔法を使うことができる者はごくわずかである。魔法は誰にでもできるわけではない。素質があるものでしか扱えない。つまりアイは選ばれし者なのだ。

「あなたの名前は？それと顔を見せてくれないかしら？」

「……タケル。」

タケルは被っていたフードをとった。驚かれると思っていたが……。

「白い髪……。きれいね。」

タケルにとって初めてのことだった。髪を褒めてくれたのはアイを入れて二人だけ。アイは、タケルから離れてドアの横にある2m近くある杖を手にする。

「あたしね、自分の未来を予知する修行をしていたの。そしたら、あなたが出てきた。あなたは、世界を救う……。そしてあなたはあたしにとって必要な存在であり、あたしはあなたにとって必要な存在なの。だから、あなた行こうとしている場所にあたしもついていく。拒否権はないわ。これは予知した未来に繋がるから、未来を変えてはならないの。」

タケルは黙って頷いた。拒否権がないのだから彼女に従うしかない。

アイは微笑んで、

「師匠に伝えてくるね！」

と言い、部屋から出て行つた。タケルはフードを被りなおし、ベッドから降りた。かなりの時間寝ていたから体が軽い。最近ベッドで寝ていなかったのでもちよつと名残惜しかった。ベッドの横に置いてあつた自分の荷物を手に取り、部屋から出た。廊下にでると、他にもたくさん部屋があつた。民宿なのだろうか。階段を下りてみると、談話室のようになっていてアイがソファに座っていた。

「師匠があなたと話がしたいって！あそこに大きな扉があるでしょう？あの中にいるから。」

アイが指差すほうを見る。今までと違う不思議な扉だつた。何かの紋章が描かれていて、それが何を示しているのかは分からない。扉のノブに手をかける。すると、押してもないのに扉が勝手に開き、タケルの体が勝手に部屋に入り、扉が勝手に閉まつた。

執務室のような場所だつた。大きな机に大きなイス。そこに座っているのは、黒いふちのメガネをかけた物腰のやわらかそうな男性。黒い衣装を身にまとい、本にでてくる魔法使いそのものだつた。

「君がアイの予知に出てきた・・・タケルだね？僕はアイの師でナギだ。」

優しく微笑んでいるが、目が笑っていない。イスから立ち上がり、こちらに近づいてくる。タケルよりも背が高いので見上げる形になっている。

「君は・・・僕の予知にも出てきた。君が世界を滅ぼしてしまうという予知をね。弟子のアイは君が世界を救うという予知を見たよ。だけど、僕とアイでは、どちらの可能性が高いかといえば、僕の可能性のほうが高い。だから君はここで死んでもらおう。」

ナギはタケルの頭に手をかざした。タケルは抵抗しようとナギの手を掴もうとしたが、体が言うことを聞かない。ナギはブツブツと

呪文のようなものを唱えた。タケルの頭に置かれていた手が青白く光りだす。力が吸い取られていく感覚がした。力が抜けて、朦朧としてくる。

これが、魔法・・・か。

もうダメだ・・・タケルがそう思った瞬間。頭の中から声がした。
“開放しなさい”

・・・と。それは自分を殺そうとしている男の声だった。こんなやつと言うことなど聞いてやるものかと、タケルは薄れゆく意識の中でも抵抗しつづけた。

“しかたがない。無理にでも開放しよう”
吸い取られていく感覚が増す。意識が飛んでしまう寸前に、あることを思い出した。それは、タケルに身に覚えのない記憶。

「この子の力は巨大すぎる！」

「しかし！この子の力を使えば、世界はわが国のものだ！」

「封印するべき力だ！この子の力は諸刃の剣となるだろう！」

城の中で大臣たちが、もめている。その中心で口論を黙って聞いていた女。その女は赤ん坊を愛おしそうに抱いている。

「姫！ご決断を！」

「私は、この子の力を利用したくはありません。亡き愛しい人との子・・・この子の力を封印しましょう。」

女は、封印の儀式を行った。

「この子供の力、我の力を持って封印す。この力開放しようとするならば、言葉を示すなり。その言葉とは・・・」

「・・・リリース（開放）」

タケルが発した言葉により、何かがあふれ出した。男が手を離すと、タケルの体が光り浮いた。白い髪が輝いて見える。タケルが目覚めます。光るのを止め、体も地に着いた。

「・・・嘘についてごめんね。こうでもしないかぎり、君の力が開

放できなかったんだ。」

タケルは今ので体力を消耗したらしく、息を切らしてその場に座り込んだ。

「ハア・はぁ・・・どういう、ことだ？」

「殺そうとしたのは嘘だ。でも、僕はたしかに君が世界を滅ぼす予知を見た。そして、君が世界を変える予知も見た。こんなこと一度もなかった。」

ナギは回復魔法だと言って、タケルに手を近づける。すると、不思議なことにタケルの体力が戻ってきている。

「・・・しかし、共通しているところがある。それは、僕が君の力の解放をすること。そこからどちらになるかは君次第・・・ってところかな？」

「今のは？」

「君の今持つている力を吸収し、君の中にあるもう一つの力を呼び起こそうとしたんだ。本当は君自身がしたほうがよかったんだけどね、変な記憶を見ただろう？それは無理やり記憶を引っ張り出したからなんだ。」

タケルは立ち上がり、ナギを見た。今までとは違う優しい眼をしていた。

「タケル！」

アイが扉を勢いよく開けた。

「アイ。もう少し、静かに扉を開けなさい。」

ナギが半分笑いながら言う。アイは顔を真っ赤にして、すみませんと謝った。ナギはイスに座りなおし、頬杖をつく。

「タケルくん、君のその白い髪は何を意味しているか、分かるかい？」

黒い煙と同じ質問をされ、少々驚いた。タケルは首を横にふる。

「いずれ君にも分かる日がくる。今までとても辛い思いをしてきたんだね、でもこれからもっと辛い思いをしなければならぬ。覚悟はできているかな？」

タケルは頷いた。すると、ナギは微笑み、アイに問いかける。

「アイ。この少年を助けてあげなさい。そして、悪い方向へ進まないように君が導くんだ。できるかな？」

タケルの隣にいたアイも頷いた。

「そうか・・・では行つてきなさい。旅に必要なものは玄関においてある」

「はい！」

「・・・それと、タケルくん。開放したおかげで少しは強くなった。しかしあの大きな力はいつでも使えるというわけではない。今度使う時は、君が世界を救うか滅ぼすかだ。」

「・・・はい」

2人はナギのいる部屋を後にした。玄関には剣が置いてあった。タケルが使う用らしい。

「じゃあ、ラスカ目指して出発！」

こうしてアイが仲間に加わった。

第三章「出会い・二」

第三章『出会い。二』

アイの道案内のおかげで森を抜け出すことができた。アイがいうには、

「習つより慣れるつてことよ」

つてことらしい。つまり、長年森をぬけたところにある国へ買出しに行っていたから覚えている、というのだ。ナギには抜け方を教わってはいないらしい。

「この国を通ればラスカよ！さつさと行つてさつさと出ましよう！」
門番に手続きをして、門をあけてもらった。

この国の名前は「ファイ」。昔から武道家たちが育つ国だといわれている。アイによれば、この国の住民はみんな筋肉質で何もかもが大きいらしい。

「あたし、この国嫌いなよねえ。なんか暑苦しいし」

その国に入った瞬間。
なるほど。

タケルはアイの言っていることに納得した。本当に国民全員が筋肉質。女子供関わらず全員がだ。でも周りをよく見ていると女が少ない。

「この国はね、移民の国なの！力自慢な男たちが挙つてファイに来るんだあ」

鼻をつまんでしゃべっている。男たちの汗が少し匂う。アイには耐え切れないのだろう。

しばらく歩いていると、街灯に同じポスターがいくつも貼つてあった。気になって見てみると・・・

「このダオ様にかかってくるやつはいねえかあ？・・・だって」
アイが呆れ口調で言った。よく見てみるとムキムキなマツチヨが
ガッツポーズをとっていて、歯をキラリと輝かせながら笑っている。
「それと・・・白い悪魔が我らを飲み込む前に俺様が成敗してくれ
よう！」

「!？」

白い悪魔・・・俺のことなのか。

「・・・」

タケルはポスターを剥ぎ取った。ポスターに書いてある地図を頼
りに走り出す。アイは訳も分からず、タケルの後を追った。

行ってみると、路地裏の広い空き地だった。

辺りを見渡すが誰もいない。ポスターの地図を確認する。ここで合
っているようだ。

「・・・お前か？俺様に挑戦するやつは？」

どこだ！？

キョロキョロと見渡すがどこにもいない。突然暗くなった。自分
の周りだけと気づき、うえを向いてみると、男が落ちて来るではな
いか。タケルは左に避けた。

“ドスン！”

落ちてきた男は・・・ポスターと違っていた。筋肉質ではあるも
ののマツチヨというほどでもない。タケルより少し年上で青年だっ
た。左目に大きな切れ目が入っている。

「ケツ！なんだよこいつ！全然強そうに見えねえじゃねえか。まあ
いい、俺の名はダオ！お前の名前は？」

「・・・タケル」

タケルは名前を告げ、羽織っていたマントをとる。汚れのない白
い髪が姿をあらわした。ダオは少し驚いていたが、何がおかしいの
かニヤリと笑った。

「ヘッ！光栄なことだな！白い悪魔がわざわざ倒されに来るなんて
よー！」

ダオは構え始めた。タケルが剣を抜こうとした瞬間、タケルの前にダオがいきなり現れた。タケルは急いで後ろに下がる。

「・・・おせえ」

「!？」

前にいたはずのダオがタケルの後ろに立っていた。

速い!

ダオがタケルに殴りかかる。タケルは剣で防ぎ、ダオと距離をとった。剣で防いだが、パンチが重い。手がしびれて剣が持ちにくくなっていた。

「なかなかやるじゃねえか!・・・けど、弱い。」

「・・・こそ!」

「ダオ!何やつてるんだお前は!」

「オヤジ!？」

ダオの後ろに大きな影ができた。太陽のせいと顔がよく見えない。3mちかくあるような人でポスターに載っていた人物によく似ていた、というか同一人物である。

親父と呼ばれた人はダオを殴りつけて、担いだ。

「すいませんねえ・・・このボンクラが失礼なことをして。俺の名はイオ、このバカ野郎の親をやってます」

深々と頭をさげられ、タケルも頭をさげる。ダオが何か叫んでいるが、また頭を殴られた。

「タケル!」

息を切らしたアイが近づいてくる。いつの間に来ていたのだろうか?

「あんだねえ、急に走らないでよ!」

「すまない」

タケルは剣をおさめて、マントを被りなおした。

「・・・ほんとうに申し訳ない。お礼とってはなんです、うちに来ませんか?お茶ぐらいなら出せますし」

イオは優しくこちらに問いかける。アイは喜んでタケルに行こう

と推す。タケルも行為に甘えることにした。

イオについて行くと、一件の大きな家がたっていた。この国はみんな大きな家なのだが、この家は取り分け大きい。中に入ると、部屋を大きくしたような内装だった。テーブルにイス、キッチンにベッドが置いてあるだけ、質素な家だ。

イオはダオをおろし、お茶を淹れてくれた。ダオはムスツとした顔立ちでイスにドカツと座り、アイとタケルは適当に空いているイスに座った。

「・・・ダオから話は聞いた。あんた、白い髪を持っているんだっ
たな？」

タケルは頷いた。

「この国には言い伝えがあつてな、月が食われたとき、白い悪魔がこの国を飲み込む・・・と。ダオは白い悪魔っていうのを白い髪を持ったやつだと思つたらしくてよ、あんたに迷惑かけちゃった。」

「なにいつてるんだよ親父！現に今日こいつが現れた！言い伝えどおりじゃねえか！それによお！俺は襲つてなんかねえぜ？こいつが俺を訪ねてきたんだ！」

タケルに指をさしながら叫ぶ。

今日は月食の日。つまり、「月が食われた」というのは月食のことである。

「タケルのこと悪く言わないでよ！髪が白いからって悪魔とは限らないでしょ！？」

アイが身を乗り出しながらまげじと声を張り上げる。

「・・・俺にも分からないんだ。だけど、俺は髪が白いだけで何も悪いことなんかしていない」

「フン！どうだかな！俺は今日一日中お前を見張ってるからな！」

そう言われて、何をするにもついてくるダオ。

ダオは後ろから2人の背中を覗みつけながらついてくる。そのせい

で強面な輩にからまれそうになったりして大変だった。

アイは苛立ち、うるさいくらい愚痴をタケルに言う。今日だけだからとアイをなだめる。

その夜。ダオの家に泊まることになった。

「俺と一緒に寝ろ！」

と言われたタケルは、しかたがなくダオと同じベッドに入ることになった。

丑三つ時……。

“ドンッ！”

遠くから爆発音がした。タケルは目を覚まし、体を起こす。隣を見ると、ダオがいない。急いで音のするほうへ急いだ。音のするほうへ行くと、ダオと出会った空き地だった。

“ドンッ！”

空き地の中央が爆発する。近づいてみると、ダオが倒れていた。タケルはダオを抱えて隅のほうに置く。

「……大丈夫か!？」

爆発をもろにくらったため、体中が傷だらけだ。

「……お、まえ、助けにきてくれたのか？」

「ああ」

「じゃ、じゃあ、あ、いつは……？」

そういつてダオは目をとじた。死んだわけじゃない、気絶しているだけだ。

「……もう動けなくなったのか? つまらん奴だ。」

聞いたことのある声。爆発の煙の中に人影が見える。

「……誰だ!？」

「俺のことを忘れたのか? また会おうといったはずだが？」

煙の中から出てきたのは……タケルだった。正確にはタケルに似た少年がこちらへ歩いてくる。タケルは驚きを隠せなかった。

また会おう……と言ったのはあの時の黒い煙。けれど、黒い煙の姿はない。

「・・・お前はあの時の黒い煙なのか？」

「ああそうだ・・・そういえば名前を言ってなかったなあ？俺の名は、レス」

レスはタケルの周りをぐるぐると回る。

「・・・なぜこんなところにいる？」

「・・・その質問には答えられない。でも、ラスカに行けば何か分かるかもなあ」

「なぜそんなにラスカにこだわるんだ！？」

「それも答えられない。」

くそっ！

レスの応答にタケルは苛立つ。レスは、時間だといってその場から姿を消した。タケルはダオを抱え、家に帰った。

次の日。タケルは皆に昨日のことを話した。

「くっそおお！負けちまった！」

ダオは傷だらけでベッドに横になっていた。体が頑丈だったのでケガした箇所は多いが、傷は浅かった。

「うるさいわねえ！ケガ人はおとなしく寝てなさいよ！」

アイは、今日特に苛立っていた。ダオがうるさいせいもあるが、昨日の夜、なにも知らずに眠っていた自分に腹が立っているらしい。

「・・・あんな強い奴と戦ったのは初めてだ。また戦てえ！！」

ダオは昨日の出来事を話し始めた。ダオは、タケルが寝るまでずっと見張っていた。タケルが寝たことを確認したら夜風にあたろうと思いい外にでた。空を見ると、月食が始まっていた。よく見ると月の周りに白い光がうろついている。白い光は月食が終わったあと、空き地に落ちた。ダオは胸騒ぎがして、空き地に向かった。空き地に行くのとタケルがいて、いきなり襲われたらしい。

「でもよお・・・お前じゃなくてホツとしたぜ。助けにきてくれてありがとな」

ダオはタケルに手を差し出す。握手しろと言われ、タケルはあわ

てててを握る。

「俺、あいつとまた戦いてえんだ！たのむ！一緒に行かせてくれ！」

「・・・分かった」

「はぁ！？」

こうして、ダオが仲間になった。

第四章「迷い」

第四章『迷い』

ファイを出て、ラスカに向かう途中。

三人は野宿をすることになり、タケルは火の番をしていた。パチパチと燃える音だけが聞こえる。

タケルは考え込んでいた。

「ラスカ」。

旅というのは早いもので、もう着いてしまった。この国で最後になる。

世界を救うか……。

世界が滅ぼすか……。

この自分にかかっているのかと思うと、ここから逃げ出したくなる。

ラスカに行けばすべてが分かる。

……けれど

すべて知ってどうする？

それで満足なのか？

レスの言うとおり、ラスカにいけばすべてがわかるのか？

レスの言うとおりにしてもいいのか？

謎は深まるばかりである。

「私は・・・タケルがいいと思えばそれに従うわ。」

「!?!?」

寝ているはずのアイがいつの間にか隣に座っていた。それだけ考え込んでいたのだろう。

「私は魔法使いよ？タケルが何を考えてるか分かるわ。タケルは考えすぎなのよ！あなたは世界を変える人間なのよ？それに、私と師匠は予知は絶対当たってるから！ラスカに行くことを悩む必要はないわ」

アイが火に指を差す。すると火力が増し、大きくなった。

「・・・ありがとう」

「!?!?べ、べつにお礼を言うほどのものでもないわよ!」

アイの顔が赤くなる。

アイは火の番変わるからといって、タケルを強引に寝かせた。

明日、ラスカに着く。

三人ですごす、最後の夜となるだろう・・・。

最終章「終始」

最終章『終始』

ラスカの国前には門番がたっついていなかった。門が人が入れるくらい開いていて、三人はそこから入ることにした。

「・・・これが、ラスカ？」

「そうだぜ？知らなかったのかよ？」

レスが見せてくれた映像とはかなり違っていた。きれいな建物が並んで国民も活気に満ちているはず。

しかし、ボロボロに崩れた建物、国民は一人も見当たらない。

ダオがいうには、何年か前に国の王が死んで、国を治める者がいなくなつた。国民は次の王をたてようとした。しかし次の王を決めるために争いが始まり、

国を治めてくれそうな人たちが死んでいった。

残された人々はファイに移住したり、他の国にいつたりしていた。それでもできない人はただ死を待っていた。

「この国はもう・・・」

「ああ、誰もいねえ。死んだんだ」

タケルはその場に崩れ落ちた。ダオとアイが心配してくれているが、その声もタケルには聞こえていない。

俺は、何のためにここまで来たんだ？

俺は・・・。

「・・・誰かおられるのですかな？」

近くの建物から老人が出てきた。老人は三人を見て、

「とりあえず、私の家に来なさい。話でもしましょうぞ」

老人はついてくるよう三人にいい、三人は老人の後をついていった。さっきの建物の中に入り、地下につづく階段を下りる。

地下には部屋があり、壁一面に本がぎっしり並んでいた。三人はテーブルに案内され、適当にいすに座った。

「・・・あの、この国に来ればすべてが分かると聞いたのですが。」
タケルは羽織っていたマントをはずした。老人は驚いた様子で白い髪をじつと見つめた。

「よかるう・・・私大臣をしておったときの話じゃ。」

・・・二十年前。先々代の王が死んだ。国のダメージが思いのほか大きく、立ち直るにはかなりの時間がかかった。しかし十六年前この国に2人の王子が誕生し、国にまた活気が戻った。

・・・2人の王子、片方は巨大な力を持ち、もう一人は巨大な心を持っていた。

先代の王は、巨大な力を封印し、家来にタチオでその王子を育てるよう命令した。

22

「・・・つまり、その王子とはお主のことなのじゃ」

「ちよつと待つてください。俺には妹がいます。それに、白い髪の謎も教えてもらっていない」

タケルは身を乗り出した。

「まだ、話は終わつたらん！」

老人は話を続けた。

タケルの質問に答えると、その妹は家来の子供で家来はそのまま死んだか、行方不明。タケルとは何のかわりもないのだ。

白い髪は、王家の証。王家の者はみな白い髪をしている。

ではなぜ、白い髪が呪われているなどとい噂がたったのか・・・。

それは・・・それよりも昔にさかのぼる。
戦争が絶えなかった頃、ラスカはとても強かった。しかし、そのとき
の王は戦い方残酷で他の国から恐れられていた。そのせいで白い
髪・・・つまりラスカの王家のものは残酷で卑劣な人間だと広まっ
たのだらう。

「タケルは呪われてるわけじゃなかったのね」

複雑な気分だ。

この国の王子で、呪われているというのは嘘。

でもこれでは、レスが言ったことと違う。

レスは聞けば不幸になると言っていた。

でも俺は不幸だとは思わない。むしろ幸福だと思っている。

「レスが言ってたことと違う・・・」

「レスじゃと!？」

老人は拳を震えるほど握り締める。その顔は怒っているようにも見
え、泣いているようにも見える。

「レスは・・・お主の双子の弟じゃ」

「んだと!？」

ダオはイスから立ち上がった。タケルも驚いている。レスは人間
ではないとおもっていた。しかし、タケルとそっくりだった点から
みると、双子であつてもおかしくはない。

「レスは人間離れしている。あやつは危険じゃ!母親を殺し、この
国を滅ぼした!」

「そのとおり。」

「!？」

皆が入り口付近を見る。レスが壁にもたれかけ立っていた。

「まだ生きてるやつがいたんだ・・・消える!」

「ぐわああ!」

老人は白い炎に包まれて、こげこげになってしまった。アイは回

復魔法を唱えるが、即死だったため意味がなかった。

「おい！俺はあのときの屈辱をはらしにきた！俺と勝負しろ！」

そういつてダオはレスに殴りかかろうとした。しかしレスは煙になり、パンチをかわす。レスはタケルの前にやってきた。

「どうだ？真実をきいた感想は？」

「・・・俺はお前を許さない」

母を殺し、国を滅ぼしたレスを、実の兄弟だが許すことができなかった。

「へえ・・・俺もお前を許さない」

「・・・なぜ？」

「俺はお前が嫌いだった。母上はお前のことばかり心配して、俺のこと何も見てくれないし、想ってもくれない。お前がいなければ俺ははじめな思いをしなかつたんだ！・・・まあいい、今はそんなこと関係ない。俺はお前以上の力も手に入れた！あとはお前の存在を消すだけだ！」

レスはタケルの胸倉を掴んだ。上に持ち上がり、首が締め付けられる。

「お前さえ消えれば、俺はこの国、いや、この世界の王となる！」

レスは高笑いをし、胸倉を掴んでいたほうの手を白く燃やす。

「・・・これで終わりだ！」

もうだめだ！

「ッ！」

掴まれていた胸倉が離される。レスが赤い炎に包まれていた。

「タケルは私の大切な人なの！タケルを傷つけるやつは許さない！」
杖をレスに向け、炎を放ち続ける。

「おい！大丈夫か？」

ダオが咳き込むタケルの背中をさする。

「あいつは俺らがなんとかする！お前はここで休んでろ！」

ダオはタケルの盾となる。

「・・・こんなチンケな炎じゃ俺は倒せない」

レスは炎を一瞬で消した。苦しんでいたはずなのに無傷である。

「じゃあこれならどう!？」

今度は杖から水を出す。水はレスを包み込む。

「じゃあ俺も魔法を使わしてもらうぜ!」

ダオは水の中に手を入れた。

「サンダーボルト!」

電気は水を通りやすい。そのため、電気の威力が増し、大ダメージを負わすことができるのだ。

「・・・雑魚が」

サンダーボルトもレスには効かず、白い炎で水を蒸発させてしまった。

アイは炎・雷・水・土などと色んな魔法を使ったが、どれもレスにはきかない。ダオも自慢の腕力で挑もうとするが、うまくかわされてしまう。しかも攻撃するたびに反撃をくらわされてダオの体もボロボロだ。

「ダオ!」

タケルが叫ぶ。ダオがタケルのほうを向いてニカッと笑う。その瞬間、ダオは白い炎に包まれ、倒れた。

「ダオ!？キヤアア!」

「アイ!」

アイは、炎の輪で体を縛られ動けなくなっていた。その反動で杖が折れる。

「これで邪魔はいなくなった・・・」

レスがこちら近づいてくる。タケルは外に出ようと急いで階段を上った。

外へ出て、広い公園まで走る。

ここなら被害が少なくてすむ。

タケルは剣を抜き、レスが来るのを待った。

「・・・そんな剣で俺が切れると思っっているのかあ？」
タケルはレスが背後にいるのを感じ、向きなおす。しかし、タケルは頭を掴まれ、身動きが取れなくなった。アイの師匠のときと同じ、力を抜けて剣をおとしてしまう。

「は・・・はなせ！」

ふと、タケルはアイの師匠が言っていたことを思い出す。

“ 今度使う時は、君が世界を救うか滅ぼすかだ。 ”

今がそのときだというのか？

俺はこいつを倒すことによって世界を変えることができるのか？

それならば、今こそあの力を使うときだ！

「・・・リリース（開放）」

タケルがああ時のように青白い光を放つ。レスはひるみ、後ろに下がった。

「それがお前の本当の力が・・・おもしれえ」

レスは白い炎をタケルに向けて放つ。しかし今のタケルには白い炎は通用しない。仕返しとばかりにタケルもレスに赤い炎を放つ。

アイとは比べ物にならないほど熱く、大きい。レスは急いでシールドをはるが、少しやけどをしたようだ。

タケルはレスに近づいていった。レスは白い炎をガムシヤラに打ち続けるがタケルには効かない。

「なぜだ！？なぜ、お前にそんな力があるんだ！俺もその力が欲しかった。こんな感情あっても無駄なのに！」

レスは泣き叫んだ。感情が豊かなせいか、悔しさと悲しさがレスを襲い、涙が止まらなくなっている。

い

「・・・俺には感情がない。だからお前がものすごく羨ましい。」

「俺が・・・羨ましい？嘘だ！こんな醜い感情、誰が欲しがる！」

「感情がないなんて、死んでるのと一緒だ。感情があるからより強くなれる。」

「でも、お前は強い。感情がないのに」

「俺のは感情に似た何かだ。仲間たちと一緒に旅したことで、俺は感情に似たものを感じた。それが俺を強くした」

「・・・俺も強くなれるかな？」

「・・・なれるさ」

「・・・でも、もう無理だ。」

「なぜ？」

「だって・・・もう悪魔に心を売っちゃった」

今までのレスの顔が一変した。目は赤く光り、口を裂け、歯がむき出しになっている。

まるで・・・悪魔のように。

「ヒヤアハハハ！コイツノ感情ハ消エタ！コノ体ハ俺ノモノダ！」
レスは黒い煙になり、国を、いや、世界を覆いつくす。

「コノ世界ヲ滅ボス！コノ世界ヲ俺ノモノニスルンダ！」
レスは雷と竜巻を起こし、他の国を襲う。

「やめろ！レス！」

「もうレスは死んだ！何を言っても無駄だ！」

タケルはレスをとめようと光を放とうとした。しかし、体力が削られていたため、光を出せるくらいの体力がない。

「くそッ！」

「ハハハハッ！……ッ！？」

レスに異変が起きた、急に苦しみ始め、黒い煙が縮んだ。やがて人の姿に戻り、その場に座りこむ。

タケルは最後の力を振り絞り、レスにちかよった。

「剣をよこせ！」

レスはタケルの腰に差しあつた剣を抜く。そして、レスは自分に剣を刺した。

「レス！？！」

「……ぐっ！こ、これでいんだよ。こ、これで世界は救われる。」

「何言ってるんだよ！なんで！？」

「俺の中にある悪魔は俺が死なないと死なない。だから……」

「……あ、あにっえ、この世界の王となつてね」

レスはそのまま動かなくなった。

数日後……。

ダオと別れた二人は、アイの師匠のいる家に帰っていた。

「……君は、これからどうする気だい？」

ナギは折れた杖を直していた。

「……またラスカに戻ります。今度は王として」

フツとナギは笑った。

「師匠！私、タケルと一緒にラスカに戻りたいんです！タケル、いいでしょ？」

アイが窓からはいつてきた。薪割りをしていたようで木屑が頭についている。

「ああ……俺は構わない。」

口元を軽く緩め、目を細める。

「今……タケルくん、笑ったね。」

これが笑うということなのか。

タケルはあの戦い後、感情を取り戻していった。笑ったのは今日が初めてである。

「笑ったほうがステキよ！」

アイがタケルに抱きつく。タケルは顔を赤らめて戸惑う。それを見たナギは可笑しくて笑ってしまった。

「タケルくん、これですべて終わったわけではないよ？これからが始まりだ。」

「はい」

タケルとアイはまた旅に出掛けた。

これから始まるもののために……。

2人が旅立った後。

「結局、あの予知は当たっていたの？」

「もちろん レスが世界を滅ぼそうとし、タケルが世界を救ったただろっ？」

「それって無理やり当たってる風に言っていない？」

「そんなことないさ、でも君がレスにとり憑かれてくれたから、予知が当たったんだだよ？ありがとう・・・カスミ」

「どういたしまして」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3964c/>

白

2010年12月14日18時07分発行